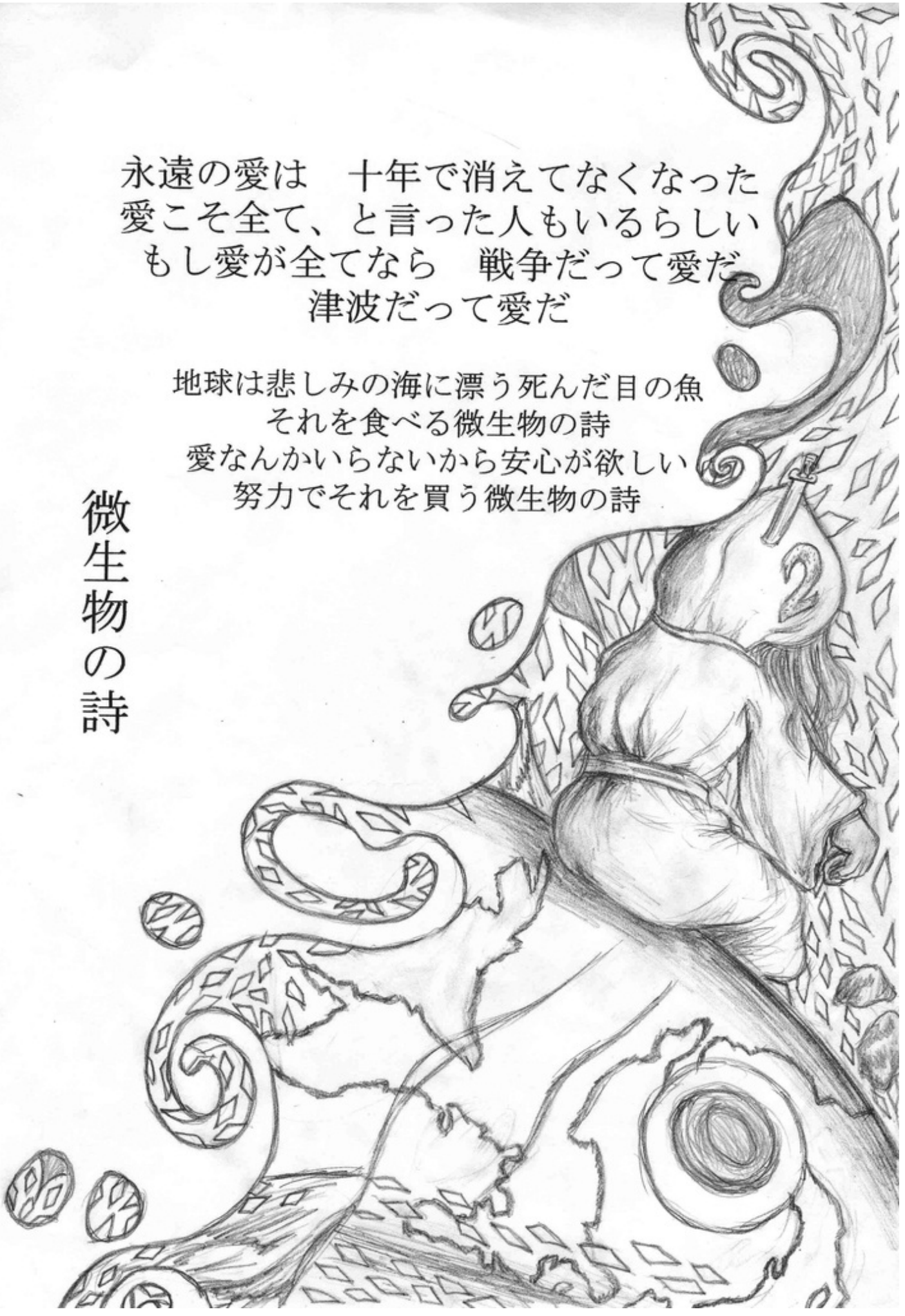
LAST LYRIC LETTER

作・画
雨野小夜美

微生物の詩

永遠の愛は　十年で消えてなくなった
愛こそ全て、と言った人もいるらしい
もし愛が全てなら　戦争だって愛だ
津波だって愛だ

地球は悲しみの海に漂う死んだ目の魚
それを食べる微生物の詩
愛なんかいらないから安心が欲しい
努力でそれを買う微生物の詩



悲しみの海を漂う僕らが　悲しいのは仕方ない
悲しみの海から生まれたからだ　涙を飲まされて
育ったからだ
ただ流されてゆくのが人生だと
悟れたら楽になれるのにな
反抗するから
誰もが信じる愛を疑うから
努力するから　余計　悲しいのだろう

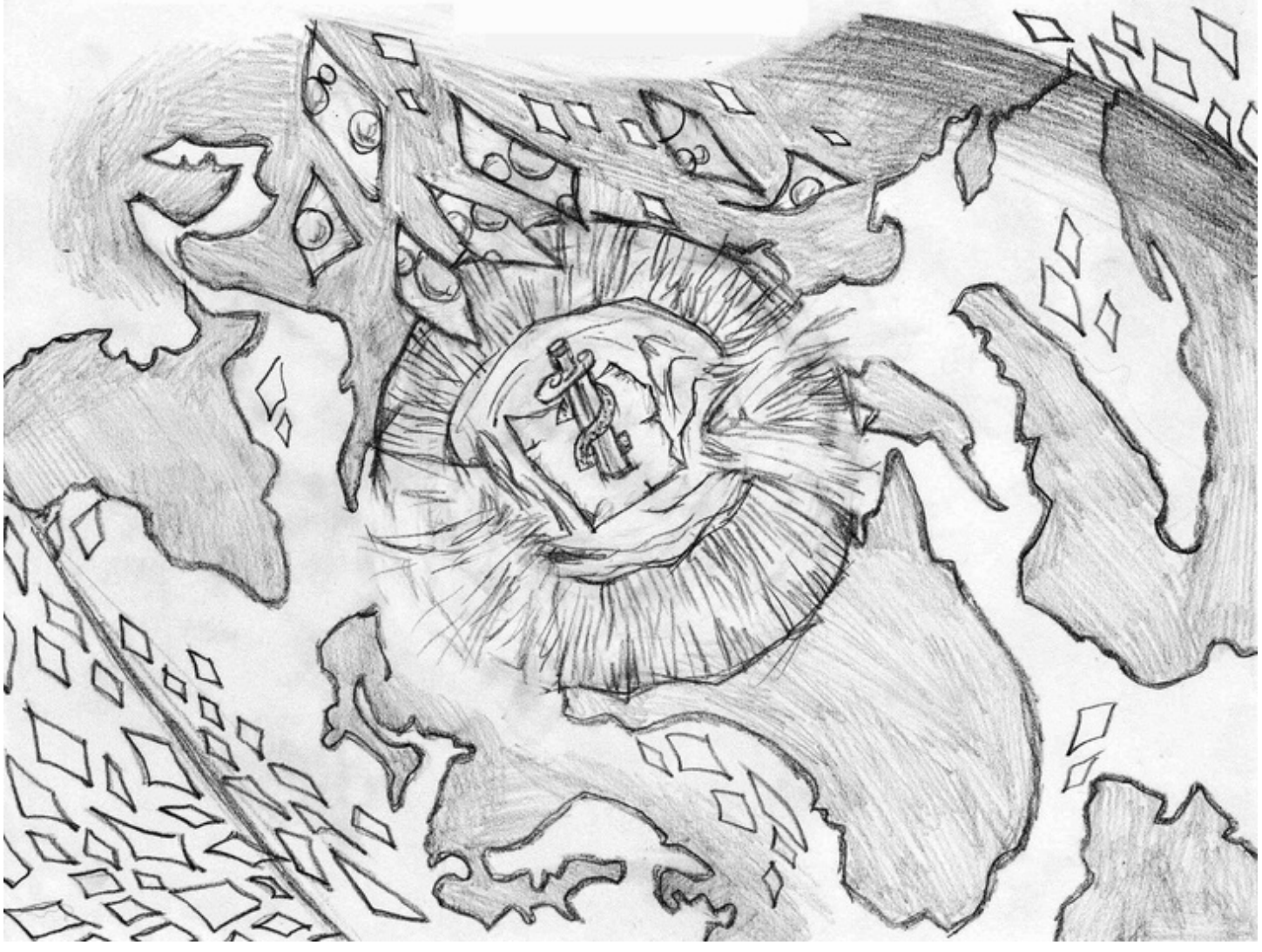
お金が無い
味方もいない
悲しい死にかけた魚の街明かりを　見ながら出勤
ゴム手袋をはめて拳を隠す
工場という最果てでしか息ができない

僕ら魚を食い潰すただの微生物
それ以上になれないとしたって

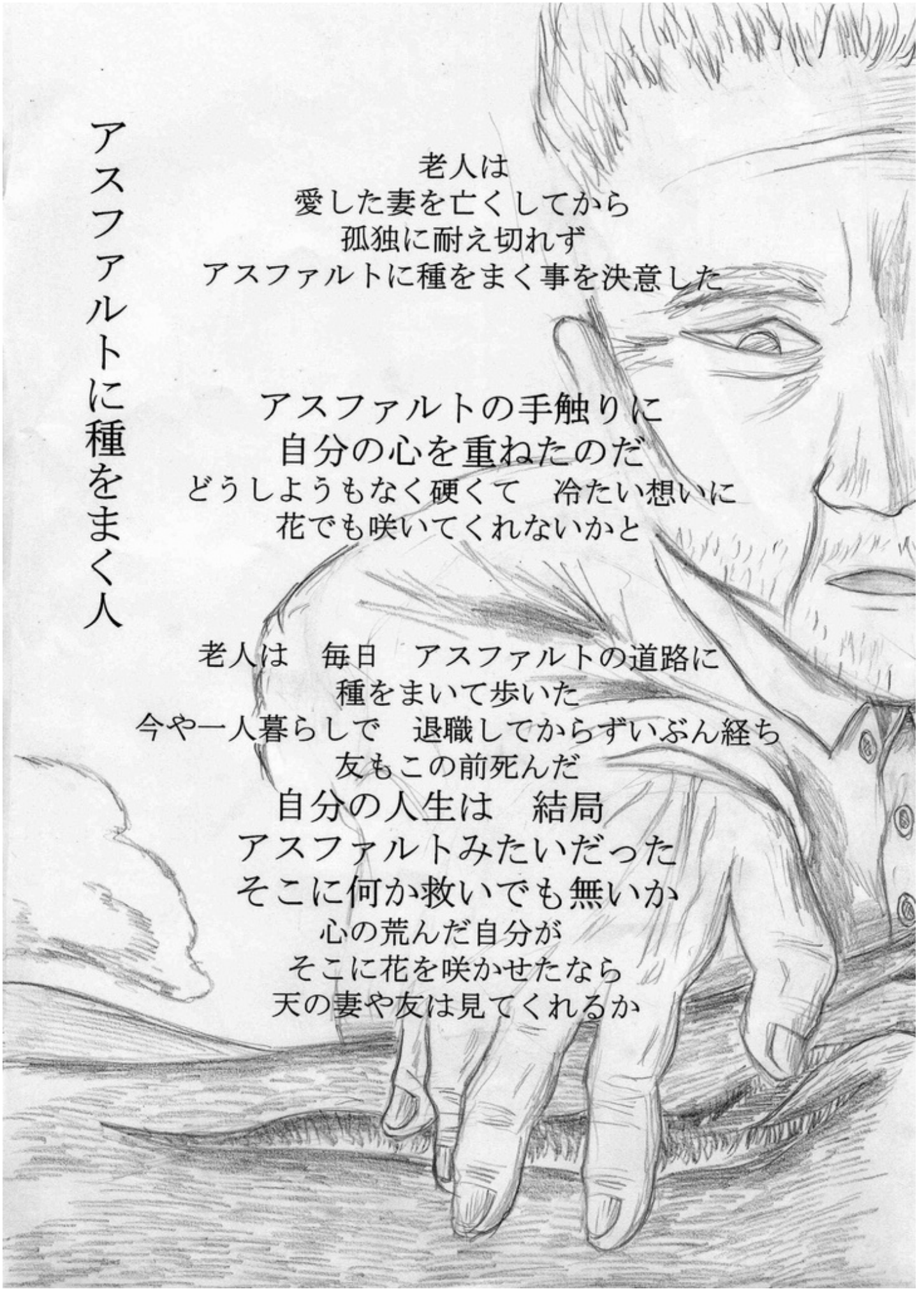
僕を僕として見てくれるものは
愛じゃない　努力だけだ
僕がもし悲しみの海からいなくなったら
愛なんか残らない
努力だけが残るんだ
青空の時も雷の時も
空の上からこんな微生物を見ていてくれる
そんな存在がある
それこそが努力だ

死にかけの魚を食らうだけの僕だとしても
働いて手に入れたものは幸せ　数えきれない
ほど
水面の透かしに理想の自分を見たよ

僕がもし悲しみの海からいなくなったら
十年で消える愛なんか残らない
努力する僕という微生物の詩　モノトーンの背中
それだけを残す



アスファルトに種をまく人



アスファルトに種をまく人

老人は
愛した妻を亡くしてから
孤独に耐え切れず
アスファルトに種をまく事を決意した

アスファルトの手触りに
自分の心を重ねたのだ
どうしようもなく硬くて　冷たい想いに
花でも咲いてくれないかと

老人は　毎日　アスファルトの道路に
種をまいて歩いた
今や一人暮らしで　退職してからずいぶん経ち
友もこの前死んだ
自分の人生は　結局
アスファルトみたいだった
そこに何か救いでも無いか
心の荒んだ自分が
そこに花を咲かせたなら
天の妻や友は見てくれるか

通行人は　ボケ老人とでも思ったのだろう
アスファルトに花は咲かないよ、と
バカにする小学生
老人ホームにでも行けばいいのに、と
吐き捨てる中学生
軽トラにぶつかりかけて
クソ野郎、と罵る男
風が痛いのだ
風が痛いのだ

老人はある日　種をまいた後で
アスファルトのひび割れをつかんで
夕日にひれ伏すように泣いた
どれだけ種をまいても
アスファルトに花は咲かない
そんな事　わかっていた
心の中が　ただ　アスファルトみたいだ
そこに花が欲しかった
もう妻はいない　友もいない　花も咲かない
アスファルトはまるで自分みたいだ

老人は　ひととおり種をまいた後
目をつむり手を合わせ
種まみれのアスファルトの上
その道路に祈るように寝た

孤独な老人にあたたかいのは
冷たいアスファルトだけだった
手足は
若き日の旅の思い出のように溶けて消えて
そのまま　老人はアスファルトになった

老人を　人々が忘れた頃
アスファルトのひび割れから次々に芽が出た
ひび割れにパンジーの花が
青空と黄と紫で
あふれんばかりに咲いた
愛した妻や　友に見えるように
これでもかと
天向けて真っ直ぐに咲いた

僕がメガネをかけない理由

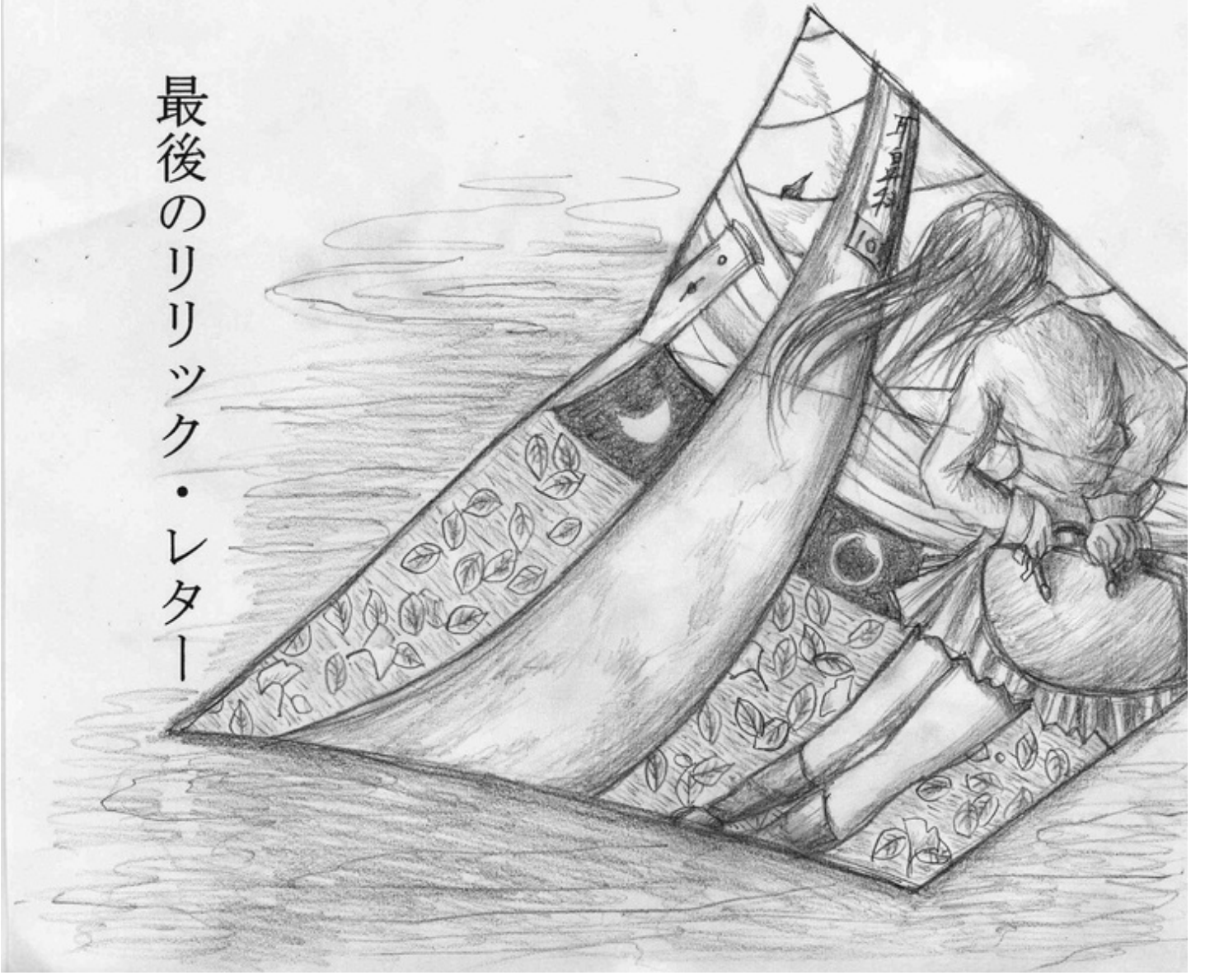
It was our beginning.
明かりがついた時　見つけたんだ
君のホクロはカシオペヤ座のように並んでいた
僕は近視なのに最近メガネをかけない
こんな世界など見たくないからだ
毎日ニュースで流れるのは
人殺し　強盗　傷害致死　戦争
全部嫌がらせに思えてきて
世界は僕が嫌いなんだと思った
僕も世界を嫌いになった
僕がメガネをかけない理由

君のパソコンが点滅して僕を待ってる
期待には応えてあげられないけど
胸のキーボードに触れたら明かりがついた
僕はそのホクロの形を好きになった
本当に近寄らないと見えないから
少し離れても見えるように
僕がメガネをかけない理由は
この世など見たくもなかったから
だけど今は　君のホクロのカシオペヤ座がもっと見たい。
はぐれたくない
今からメガネを探しに行くよ
Hush
Hush!

MEMORY OF A BEAUTYFUL DAY
ISN'T IT?
君が静脈に触れたら明かりがついた
星空だけは見たくなった
WHAT A GOOD DAY

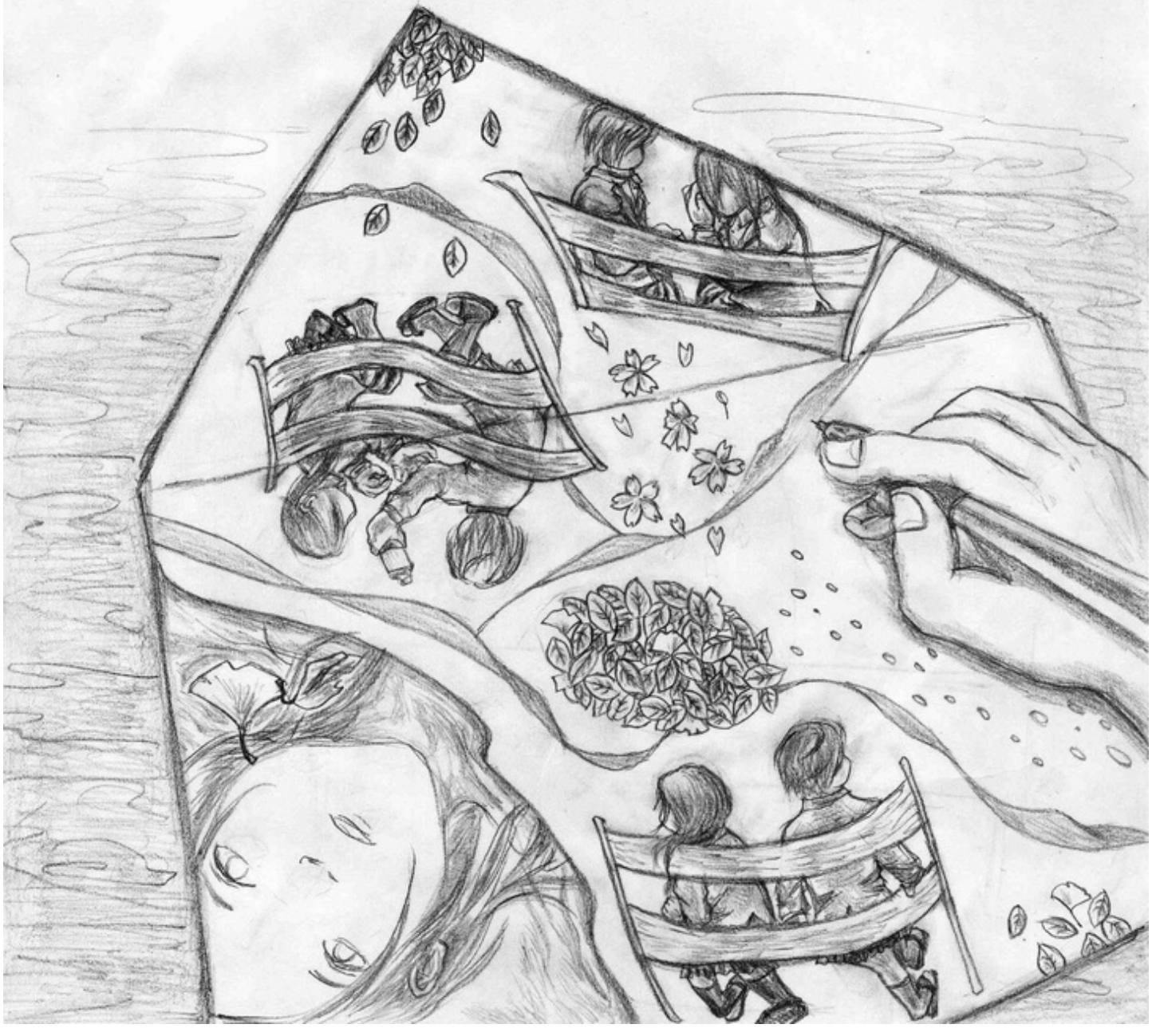
僕ら「はじめまして」って言った瞬間にお別れだ
またどこかで出逢ったとしたって
絶対にふくらまない、もうしおれた風船を
ふくらましているだけ

学生時代、「ありがとう」を超える言葉を
見つけたんだ
それは「ごめんね」っていう言葉
いつも君に迷惑ばかりかけてた
当時の僕の気持ちを　正確に表していた



最後のリリック・レター

君を盗んで　鏡の中にでもそっと　赤い鉢の中にでも
そっと
閉じこめておきたかった気持ちさえ
「よろしく」って言った瞬間にお別れだ
君がもし　これを読んだとしたら……
「ありがとう」じゃなく
最後に「ごめんね」と書いておこうかと思い
でもそこで手が止まるのが　今の僕なんだ



帰り道、百均の前で
どうしても言わなきゃならなかった「ごめんね」を見
つけた瞬間に
スコールが来て　僕らお別れだった
君に守られてばかりの、弱い僕が初めて
ブレザーのポケットに入れて守った言葉
もし今の君に、その「ごめんね」の意味がわからなか
ったとしたら……
そんなに悲しい話は無いよ
僕だってもう、わからないから

とうとうふくらまなかったしおれた風船は

「ごめんね」より正確に
今の僕の心のかたちを表していた

偽造

偽造

僕は荒れ地に群がる　作業員にきいた。
「こんな荒れ地に　何を造っているんですか」と。

彼らは答えた。
「我ら　希望の橋を　偽造しているのだ」

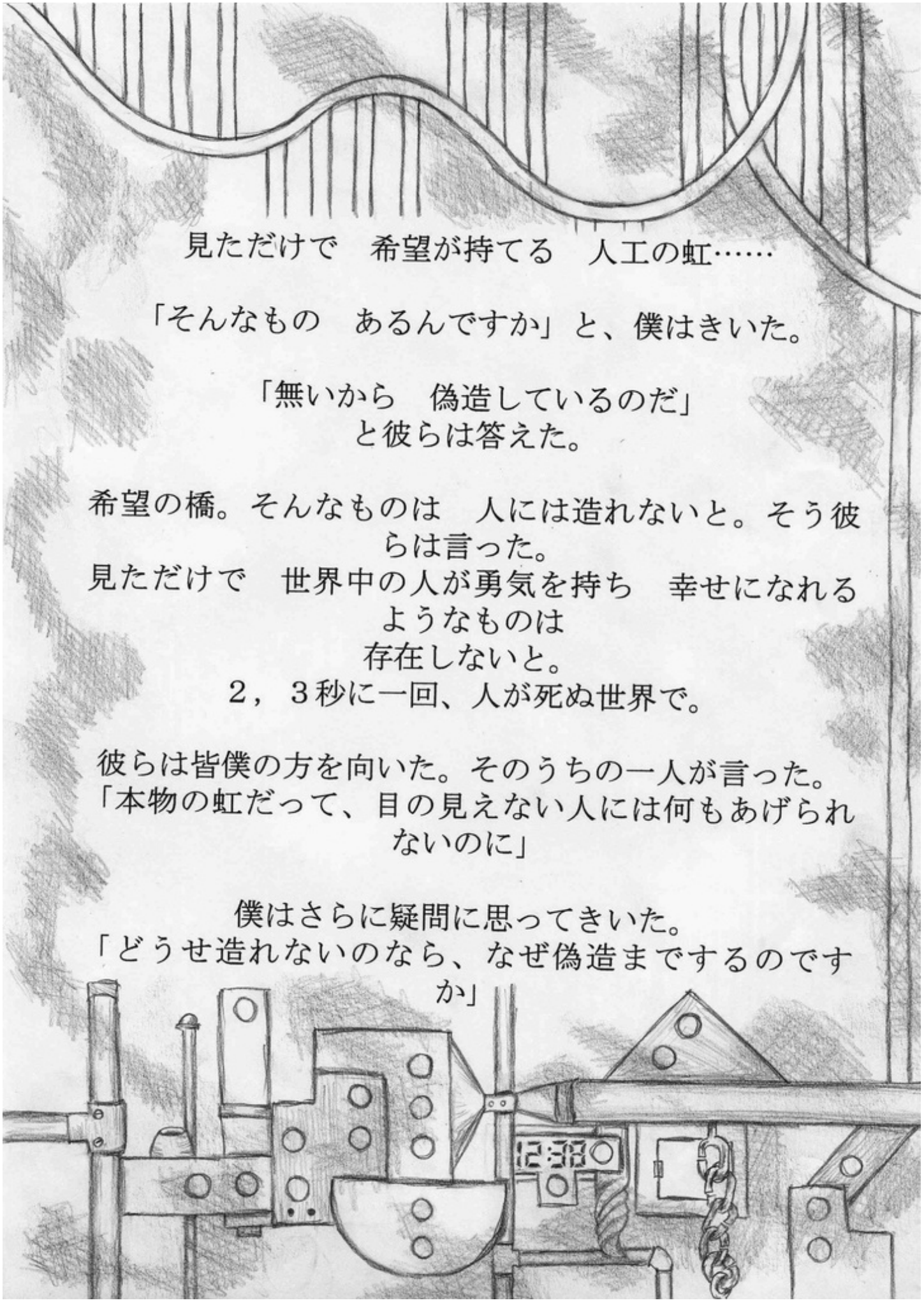
僕は変な話だと思って言った。
「ここは川じゃないのに　なぜ橋を造っているんですか」

「虹は　川の上に架かるものじゃないだろう」
彼らは答えた。

つまり、人工の虹を造っているのだ、と。

「希望の橋とは　一体どんなものなんですか」
僕はきいた。興味が湧いた。

「見ただけで　世界中の人が　希望を持てる橋だ」
彼らは口をそろえた。



見ただけで　希望が持てる　人工の虹……

「そんなもの　あるんですか」と、僕はきいた。

「無いから　偽造しているのだ」
と彼らは答えた。

希望の橋。そんなものは　人には造れないと。そう彼らは言った。
見ただけで　世界中の人が勇気を持ち　幸せになれるようなものは
存在しないと。
２，３秒に一回、人が死ぬ世界で。

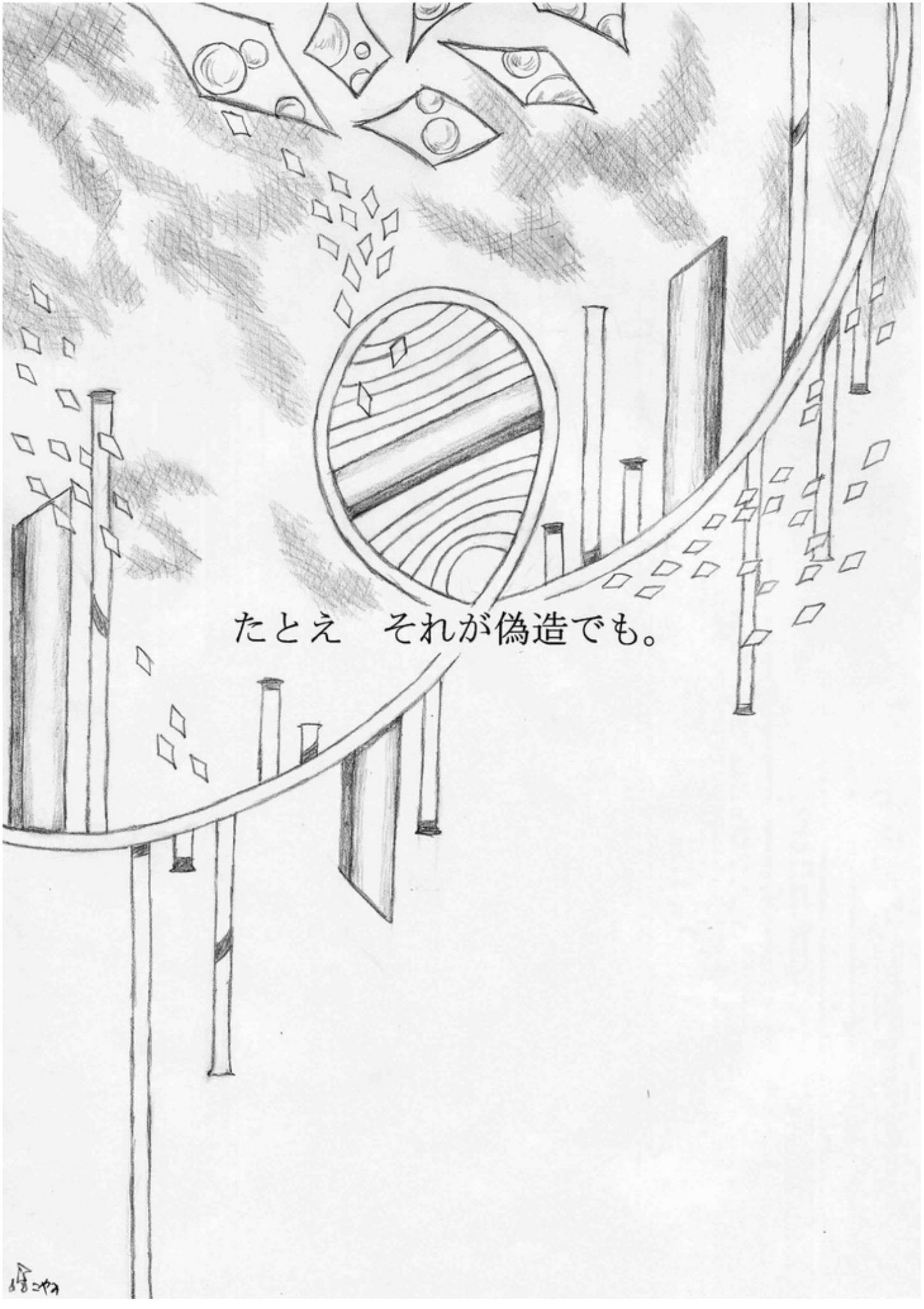
彼らは皆僕の方を向いた。そのうちの一人が言った。
「本物の虹だって、目の見えない人には何もあげられないのに」

僕はさらに疑問に思ってきいた。
「どうせ造れないのなら、なぜ偽造までするのですか」

彼らは答えた。
「ここで話している　わずかな時間にも
誰かは癌になり　誰かは事故で亡くなり　誰かは泣く
だろう」
彼らのうちの一人が涙を拭いた。
「世界中の人々が希望を持つなど
ばかげた発想でも」

世界中の人々に希望をあげようとした　我ら
作業員の
このばかげた作業をきっと
誰かは見ていてくれるだろう。
それは　近所の人だけかもしれない。
わずかな通行人だけかもしれない。
あなただけかもしれない。

我ら　世界中の人々に希望をあげようとしているのだ。
その姿だけ　届いてほしい。
毎日毎日　人工の虹を　希望の橋を
頑張って造るから。
架空の希望でも　架けるのは確かだ。
希望があげられなくても。見たのがあなただけでも。
希望の橋を 造るのだ。
この気持ちだけ　届いてほしい。


たとえ　それが偽造でも。